

大久保利通の生涯



志士時代の久保利通



大久保 利通（おおくぼ としみち、文政十三年八月一〇日—明治十一年（一八七八年 五月一四日）は、日本の武士（薩摩藩士）、政治家。位階勲等は贈従一位勲一等。

明治維新の元勲であり、西郷隆盛、木戸孝允と並んで「維新の三傑」と称される。また維新の十傑の1人でもある。

生涯

生い立ち

文政十三年八月一〇日（一八三〇年九月二六日）、薩摩国鹿兒島城下高麗町（現・鹿児島県鹿児島市高麗町）に、琉球館附役の薩摩藩士・大久保利世と皆吉鳳徳の次女・福の長男として生まれる（幼名は正袈裟：しょうけさ）。大久保家の家格は御小姓と呼ばれる身分で下級藩士であった。幼少期に加治屋町（下加治屋町方限）に移住し、下加治屋町の郷中や藩校造士館で、西郷隆盛や税所篤、吉井友実、海江田信義らと共に学問を学び親友・同志となった。武芸は胃が弱かったため得意ではなかったが、討論や読書などの学問は郷中のなかで抜きん出ているという。

天保一五年（一八四四年）、元服し、通称を正助（しょうすけ）、諱は利済と名乗るが、後に改名する。

幕末

弘化三年（一八四六年）より、藩の記録所書役助として出仕する。嘉永三年（一八五〇年）のお由羅騒動では父・利世とともに連座して罷免され謹慎処分となる。以後、大久保家は貧しい生活を強いられ、この時の借金依頼の手紙や証文が現在残る大久保の文書で最も古いものとされている。島津斉彬が藩主となると謹慎を解かれ、嘉永六年（一八五三年）五月に記録所に復職し、御蔵役となる。安政四年（一八五七年）七月一日、西郷とともに徒目付となる。精忠組の領袖として活動し、安政五年の斉彬の死後は、失脚した西郷に代わり新藩主・島津茂久の実父・忠教（後の久光）に税所篤の助

力で接近する。篤の兄で吉祥院の住職・乗願が忠教の囲碁相手であったことから、乗願経由で手紙を渡したのが始まりといわれる。

万延元年（一八六〇年）三月十一日、重富邸にて忠教と初めて面会し、閏3月、勘定方小頭格となる。文久元年（一八六一年）十月二十三日、御小納戸役に抜擢され藩政に参与（去る十月七日には堀仲左衛門も御小納戸役に抜擢）、家格も一代新番となる [2]。

文久元年一二月一五日（一八六二年一月一四日）から同2年（1862年）1月中旬までの間に久光から一蔵（いちぞう）の名を賜り通称を改める。

倒幕・王政復古

文久二年（一八六二年）に久光を擁立して京都の政局に関わり、公家の岩倉具視らとともに公武合体路線を指向して、一橋慶喜の將軍後見職、福井藩主・松平慶永の政事総裁職就任などを進めた。同年五月二十日、御小納戸頭取に昇進となる。この昇進により、小松清廉、中山中左衛門と並んで久光側近となる。文久三年（一八六三年）二月一〇日には、御側役（御小納戸頭取兼務）に昇進する。慶応元年（一八六五年）一月下旬～五月の間に利通と改諱する（久光の七男・真之助が元服し、久済と名乗ったため、「済」の字を避諱したとい）。

慶応二年（一八六六年）、第二次長州征討に反対し、薩摩藩の出兵拒否を行っている。慶応三年（一八六七年）、雄藩会議の開催を小松や西郷と計画し、四侯会議を開催させる。しかし四侯会議は慶喜によって頓挫させられたため、今までの公武合体路線を改めて武力倒幕路線を指向することとなる。小松、西郷とともに公議政体派である土佐藩の後藤象二郎・寺村道成・真辺栄三郎・福岡孝弟、浪人の坂本龍馬・中岡慎太郎との間で將軍職の廃止、新政府の樹立等に関する薩土盟約を三本木の料亭にて結ぶも、思惑の違いから短期間で破棄。

武力による新政府樹立を目指す大久保・西郷・小松は八月一四日に長州藩の柏村数馬に武力政変計画を打ち明け、それを機に九月八日に京都において薩摩藩の大久保・西郷と長州藩の広沢真臣・品川弥二郎、広島藩の辻維岳が会し出兵協定である三藩盟約を結んだ。なお、この三藩盟約書草案は大久保の自筆によって書かれたもので、現在も残っている。

十月十四日、正親町三条実愛から倒幕の密勅の詔書を引き出した大久保は、小松・西郷らと詔書の請書に署名し、倒幕実行の直前まで持ち込むことに成功した。しかし、翌日に土佐藩の建白を受けていた江戸幕府將軍・徳川慶喜が大政奉還を果たしたため、岩倉ら倒幕派公家とともに、王政復古のクーデターを計画して実行する。王政復古の後、参与に任命され、小御所会議にて慶喜の辞官納地を主張した。

明治維新後

慶応四年一月二三日、太政官にて大阪への遷都を主張する。明治二年七月二十二日（一八六九年）に参議に就任し、版籍奉還、廃藩置県などの明治政府の中央集権体制確立を行う。明治四年（一八七一年）には大蔵卿に就任し、岩倉使節団の副使として外遊する。外遊中に留守政府で問題になっ



サンフランシスコにて撮影

ていた朝鮮出兵を巡る征韓論論争では、西郷隆盛や板垣退助ら征韓派と対立し、明治六年政変にて西郷らを失脚させた。

「大久保政権」

明治六年（一八七三年）に内務省を設置し、自ら初代内務卿（参議兼任）として実権を握ると、学制や地租改正、徴兵令などを実施した。そして「富国強兵」をスローガンとして、殖産興業政策を推進した。

明治七年（一八七四年）二月、佐賀の乱が勃発すると、直ちに自ら鎮台兵を率いて遠征、瓦解させている。また台湾出兵が行われると、戦後処理のために全権弁理大使として九月一四日に清に渡った。交渉の末に、十月三十一日、清が台湾出兵を義挙と認め、50万両の償金を支払うことを定めた日清両国間互換條款・互換憑単に調印する。また、出兵の経験から、明治八年（一八七五年）5月、太政大臣の三条実美に海運政策樹立に関する意見書を提出した。

大久保はプロイセン（ドイツ）を目標とした国家を目指していたといわれる。明治六年（一八七三年）以降の大久保存命中の政権は、一般に「大久保政権」と呼ばれる。当時、大久保への権力の集中は「有司専制」として批判された。また、現在に至るまでの日本の官僚機構（霞ヶ関官界）の基礎は、内務省を設置した大久保によって築かれたともいわれている。

明治十年（一八七七年）には、西南戦争で京都にて政府軍を指揮した。また自ら総裁となり、上野公園で八月二日から十一月三〇日まで、第1回内国勸業博覧会を開催している。その後、侍補からの要請に乗る形で自らが宮内卿に就任することで明治政府と天皇の一体化を行う構想を抱いていた。



大久保の墓（青山霊園）

暗殺

明治十一年（一八七八年）五月一四日、石川県士族の島田一郎・長連豪・杉本乙菊・杉村文一・脇田巧一、島根県士族・浅井寿篤により紀尾井坂（東京都千代田区紀尾井町）にて暗殺された（紀尾井坂の変）。享年四九（数え年）、満四七歳没。墓所は東京都港区の青山霊園にある。

人物・逸話

- 身長：一七五～一七八 cm、体重：六五～七〇 kg。
血液型はO型。
- 雅号：甲東
- 座右の銘：「為政清明」、「堅忍不拔」
- 尊敬する人物：オットー・フォン・ビスマルク、徳川家康

仕事ぶり

- 金銭には潔白で私財を蓄えることをせず、必要だが予算のつかなかった公共事業に私財を投じ、国の借金を個人で埋めていたために死後は



銅像
（鹿児島市）

八〇〇〇円もの借金が残った。ただし残った借財の返済を遺族に求める債権者はいなかった。政府は協議の結果、大久保が生前に鹿児島県庁に学校費として寄付した八〇〇〇円を回収し、さらに8,000円の募金を集めてこの一万六〇〇〇円で遺族を養うことにした。

- 寡黙で他を圧倒する威厳を持ち、かつ冷静な理論家でもあったため、面と向かって大久保に意見できる人間は少なかったと言う。桐野利秋も大久保に対してまともに話ができなかったので、大酒を飲んで酔っ払った上で意見しようとしたが、大久保に一瞥されただけでその気迫に吞まれすぐに引き下がったといわれる。他にも若い頃から勇猛で鳴らした山本権兵衛さえも、大久保の前ではほとんど意見できなかったという。
- 大久保が内務省に登庁しその靴音が廊下に響くと職員たちは私語を止め、それまでざわついていた庁舎内が水を打ったように静まり返ったと千坂高雅が語っている。
- 大久保の部下だった河瀬秀治は、大久保の没後の内務省で後任の内務卿である伊藤博文の部屋で西郷従道や中井弘が盛んに夕べの宴会の話をしたり用もないのに中井弘が出入りするようになるなどすべてが奢侈に流れ墮落したと嘆いている。
- 福地源一郎は大久保の人物を「政治家に必要な冷血があふれるほどあった人物である」と評した。
- 大隈重信は大久保を「維新時代唯一の大政事家」と評し、意思の堅固と冷静で決断力に富んでいる点を挙げている。さらに同じく維新の三傑の一人木戸孝允とともに「維新時代の二大英傑」と評している（大隈は西郷を評価していなかった）。
- 明治六年（一八七三年）に五代友厚に浜寺公園へ案内された大久保は、堺県令・税所篤が園内の松を伐採して住宅地として開発しようとするのを知り、「音に聞く 高師の浜のはま松も 世のあだ波はのがれざりけり」と反対する歌を詠んだ [7]。税所はこの歌を知り開発計画を撤回した。なお、浜寺公園の入り口付近にこの時に詠んだ歌が、「惜松碑（せきしょうひ）」として顕彰され 家庭内では子煩悩で優しい父親だったという。出勤前のわずか一〇分か一五分の間を唯一の娘である芳子を抱き上げて慈しんだ。また大久保が馬車で自宅に帰ってくると、三男の大久保利武ら子ども達が争って、玄関に出迎え靴を脱がせようとして、勢いあまって後ろに転がるのを見て笑って喜んでいた。平生は公務が忙しく、家族と夕食を摂ることもままならなかったが、土曜日は自らの妹たちも呼んで家族と夕食を摂るようにしていた。大久保はこの土曜日の家族との夕食を無上の楽しみにしていたという。
- 趣味は囲碁。碁好きの島津久光に接近するために碁を学んだのがきっかけで生涯の趣味となった。なおそれ以前の嘉永元年（一八四八年）の日記に碁を三番打って負けたとの記述がある。
- ヘビースモーカーで、濃厚な指宿煙草（日本で初めて栽培されたたばこ）を愛用し、子供達が朝晩パイプを掃除しなければすぐに目詰まりするほどだった。また、朝用と夜用のパイプをそれぞれ分けて使っていた。
- 茶は京都宇治の玉露を濃く淹れたものを好んだ。
- 漬物も好きで、何種類か並んでいないと機嫌が悪かったという。
- 朝食には珈琲と、ブランデーを少し垂らしたオートミールを好んだ。
- 写真嫌いだった西郷隆盛とは対照的に、写真が好きで多くの肖像写真がある。
- 青いガラス製の洗面器具を使い、家庭内においても洋間に滞在しながら洋服を着用し、当時としては非常に洋風な生活をしていた。また頭髪をポマードでセットしていた。

- 明治八年から一年かけて、麴町三年町（旧丹羽左京大夫邸及び旧佐野日向守邸跡）に白い木造洋館を建てた（建築費用は恩賜金と盟友税所篤からの借金で賄ったとされる。後にこの邸はベルギー公使館となった）。当時は個人の家としては珍しい洋館であったが、金をかけたものではなかった。また、これとは別に高輪に純和風の別邸を所有していた。
- 征韓論で対立した江藤新平との確執で知られ、佐賀の乱で江藤が死罪となった際には日記に江藤への罵倒ともとれる言葉を残している。このことから「江藤を死罪にした裁判長の河野敏謙は大久保から一〇〇〇円で買収された」「上京していた江藤の弟源作を見て江藤の亡霊を見たかのように驚いた」など当時から現在に至るまで様々な創作、風説を生み出している。
- 鹿児島が暴発したときには、伊藤博文に対して「朝廷不幸の幸と、ひそかに心中には笑いを生じ候ぐらゐにこれあり候」と鹿児島を掃蕩できるとし、また西郷については、これでは私学校党に同意せず「無名の軽拳」をやらかさないだろうと書き送っている（明治十年二月二日付書簡）。しかし西南戦争前に西郷が参加していることが分かると、西郷と会談したいと鹿児島への派遣を希望したが、大久保が殺されることを危惧した伊藤博文らに朝議で反対されたため、希望は叶わなかった。
- 西郷死亡の報せを聞くと号泣し、時々鴨居に頭をぶつけながらも家の中をグルグル歩き回っていた（この際、「おはんの死と共に、新しか日本が生まれる。強か日本が……」と言ったようだ）。西南戦争終了後に「自分ほど西郷を知っている者はいない」と言って、西郷の伝記の執筆を重野安繹に頼んでいたりしていた。また暗殺された時に、生前の西郷から送られた手紙を持っていたと高島鞆之助が語っている。
- 明治十一年（一八七八年）に暗殺される日の朝、福島県令山吉盛典に対し、「ようやく戦乱も収まって平和になった。よって維新の精神を貫徹することにするが、それには三十年の時期が要る。それを仮に三分割すると、明治元年から十年までの第一期は戦乱が多く創業の時期であった。明治十一年から二十年までの第二期は内治を整え、民産を興す即ち建設の時期で、私はこの時まで内務の職に尽くしたい。明治二十一年から三十年までの第三期は後進の賢者に譲り、発展を待つ時期だ」と将来の構想を語ったという（『済世遺言』）。
- 地元鹿児島では「西郷どんの敵」として人気が無く、銅像が建てられたのも西南戦争百周年の機会による（その時の理由も、他県から「どうして鹿児島には大久保像がないのか？」と疑問や不審の声があったからだという）。

略系図

大久保氏

明確ではないが藤原氏末流を称している。家紋は左三つ藤巴。戦国時代末に京都から薩摩に移るといふが、系図は貞享年間に市来郷川上に中宿（城下に籍を残したまま他郷へ移住すること）した仲兵衛より始

家族・子孫

安政四年（一八五七年）一二月、薩摩藩士・早崎七郎右衛門の次女・満寿子と結婚。満寿子との間には長男・大久保利和、次男・牧野伸顕、三男・大久保利武、五男・石原雄熊、長女・芳子が生まれ

た。芳子は後の外務大臣・伊集院彦吉に嫁いだ。大久保には妻の外におゆう（杉浦勇、京都・祇園のお茶屋一力亭の九代目主人・杉浦治郎右衛門為充の娘。芸妓か？）という愛妾が居り、おゆうとの間に四男・大久保利夫、六男・大久保駿熊、七男・大久保七熊、八男・大久保利賢を儲けた。

孫の大久保利謙は日本近代史家、国立国会図書館憲政資料室の成立に寄与した。もう一人の孫大久保利春は丸紅専務で、ロッキード事件に際しては贈賄側の一人として逮捕・起訴され有罪判決を受けた。「じいさんにあわせる顔がない」が口癖だったという。

曾孫に吉田健一（作家）、大久保利晃（放射線影響研究所理事長、前産業医科大学長）、玄孫に寛仁親王妃信子、牧野力（通産事務次官）、麻生太郎（第92代内閣総理大臣）、武見敬三（元参議院議員）がいる。

父・利世の沖永良部島時代の島妻の子孫に植村花菜がいる。

参考文献

- 『大久保利通文書』全10冊 本史籍協会叢書、1927～29年。東京大学出版会、1983年に復刻。
- 弘文館、1965年、復刻マツノ書店、2005-2008年。
- 勝田孫弥『大久保利通伝（上中下）』同文館、1910-1911年、1921年。
- 清沢洌『外政治家としての大久保利通』中公文庫、1993年、初版中央公論社、1942年。
- 牧野伸顕『回顧録』新版は中公文庫上下、1978年。※牧野は大久保の次男。
- 毛利敏彦『大久保利通』＜維新前夜の群像5＞中公新書、1974年。
- 勝田政治『“政事家”大久保利通—近代日本の設計者』講談社〈講談社選書メチエ273〉、2003年（平成15年）。佐々木克『大久保利通と明治維新』歴史文化ライブラリー・吉川弘文館、1998年。